

〈2023 年度〉

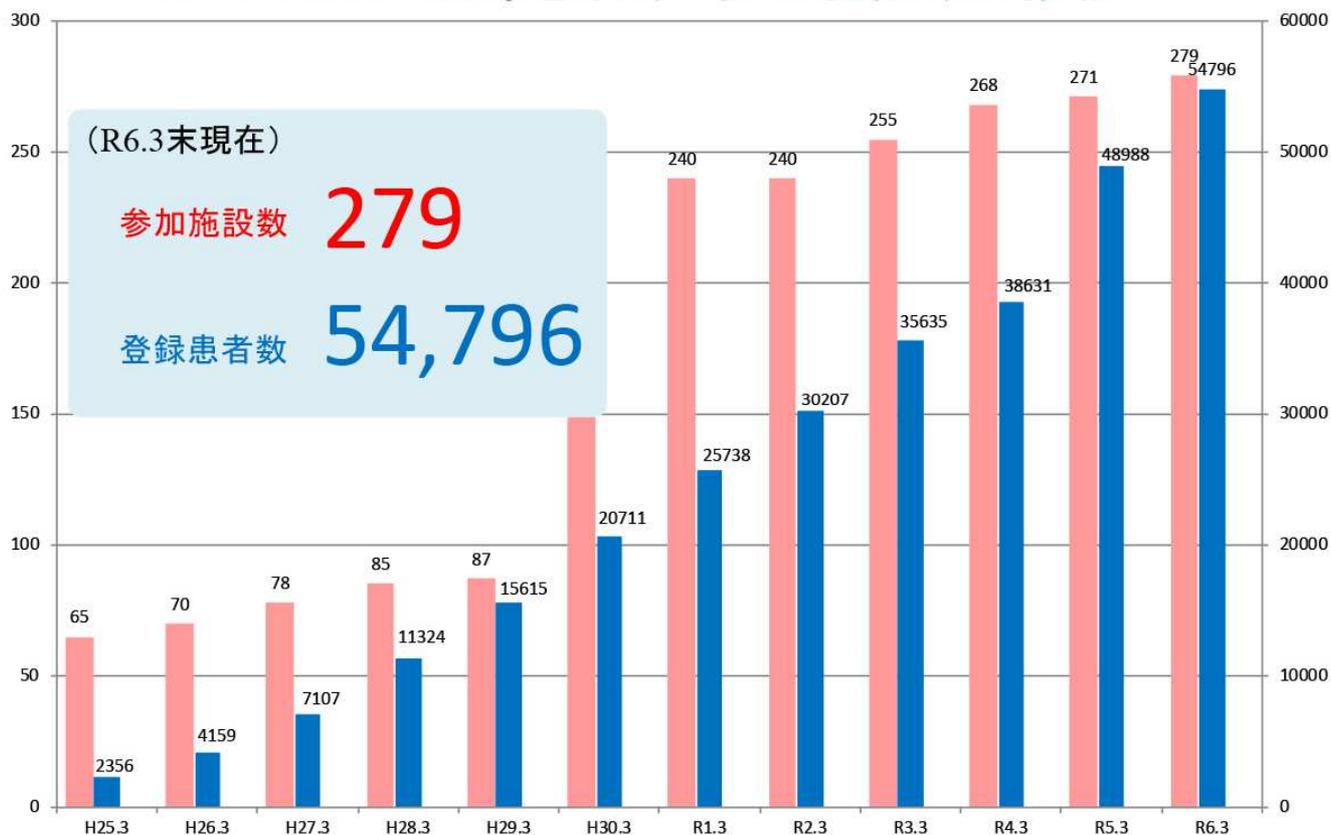
ism-Link の検証

南信州在宅医療・介護連携推進協議会
飯田下伊那診療情報連携システム運営小員会

医療と介護の連携において、円滑な情報共有は重要な課題の一つとなっている。飯田下伊那診療情報連携システム（ism-Link）は、2009年度に導入され、2011年12月に情報開示6病院を中心に運用を開始した。その後、システム更新を機に、2016年4月に南信州広域連合に事務局を設置し、南信州在宅医療・介護連携推進協議会の飯田下伊那診療情報連携システム運営小委員会において運用方法等の検討を行っている。その中で、ism-Linkが当地域の医療・介護連携における「情報インフラ」として適切なシステムであるかどうかを検討するため、定期的にism-Linkの利活用の状況、医療・介護連携における効果等について検証作業を実施している。

	項目	検証に必要な主要データ	詳細
1	基本事項	参加医療・介護関係事業者数	<ul style="list-style-type: none"> ・地域全体の医療・介護関係事業者数把握（資源把握） ・参加事業者数集計（全体/業種別） ・参加率（地域全体/業種別）
2	基本事項	ism-Linkに同意した住民の数	<ul style="list-style-type: none"> ・地域全体の登録患者数
3	病病連携	病院間連携での閲覧状況	<ul style="list-style-type: none"> ・病院間アクセス件数 ・地域連携パスにおけるism-Linkでの連携 ・その他転院時におけるism-Linkでの連携
4	病診連携	病診間連携での閲覧状況	<ul style="list-style-type: none"> ・病⇒診アクセス件数 ・診⇒病アクセス件数 ・がん地域連携パスにおけるism-Linkでの連携
5	多職種連携	医療介護連携での閲覧状況	<ul style="list-style-type: none"> ・連携シート作成数に対するism-Link登録患者 ・診病介間アクセス件数
6	情報共有項目	項目別閲覧状況	各項目 ^{※1} のアクセス件数 ※1 画像・検査・注射・処方・レポート・ファイル・ノート

[ism-Link] 登録患者数・参加施設数の推移



2024.3 末

施設	地域施設数	参加施設数	参加率
病院	9	9	100%
診療所	101	70	69%
歯科診療所	78	27	35%
調剤薬局	66	63	95%
訪問看護ステーション	16	16	100%
介護関係事業所 (行政含む)	192	94	49%
合計	462	279	60%

検証項目 3～6

(1) アクセス件数の年次推移

図1 施設別アクセス件数の年次推移

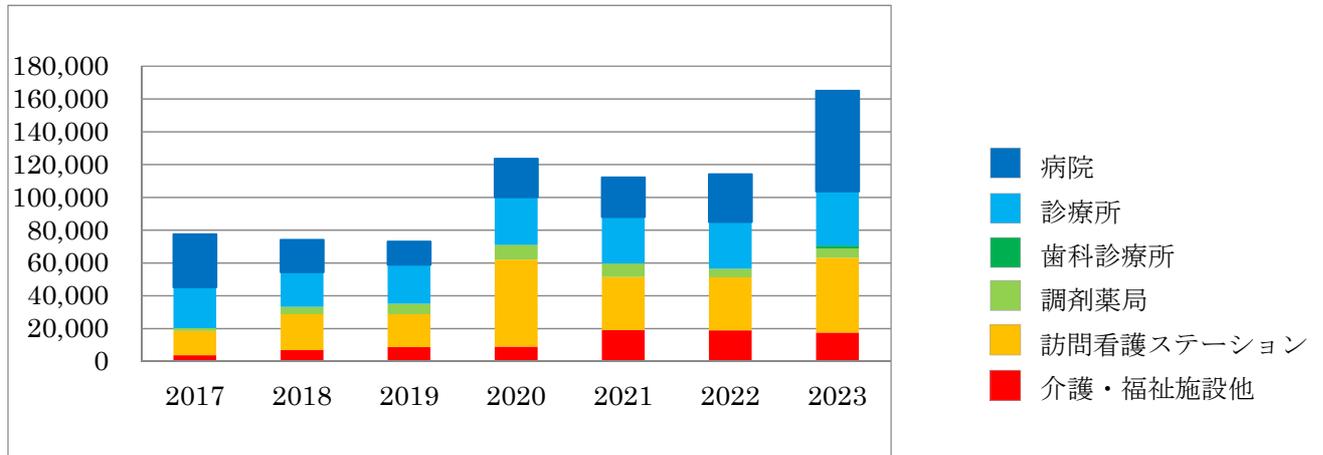


図2 職種別アクセス件数の年次推移

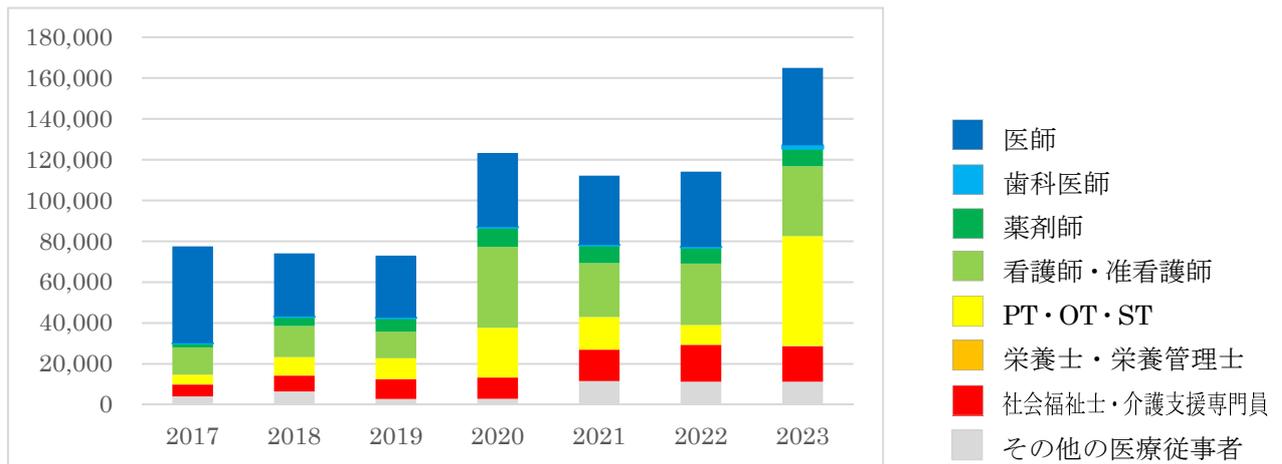
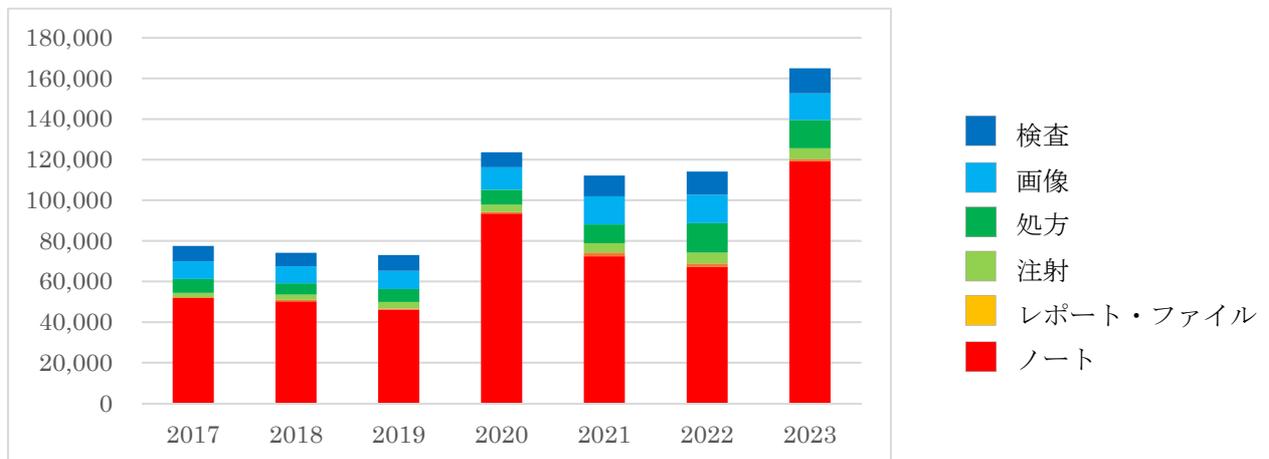


図3 項目別アクセス件数の年次推移



(2) 施設別のアクセス状況

図 4 病院の参照先・参照項目

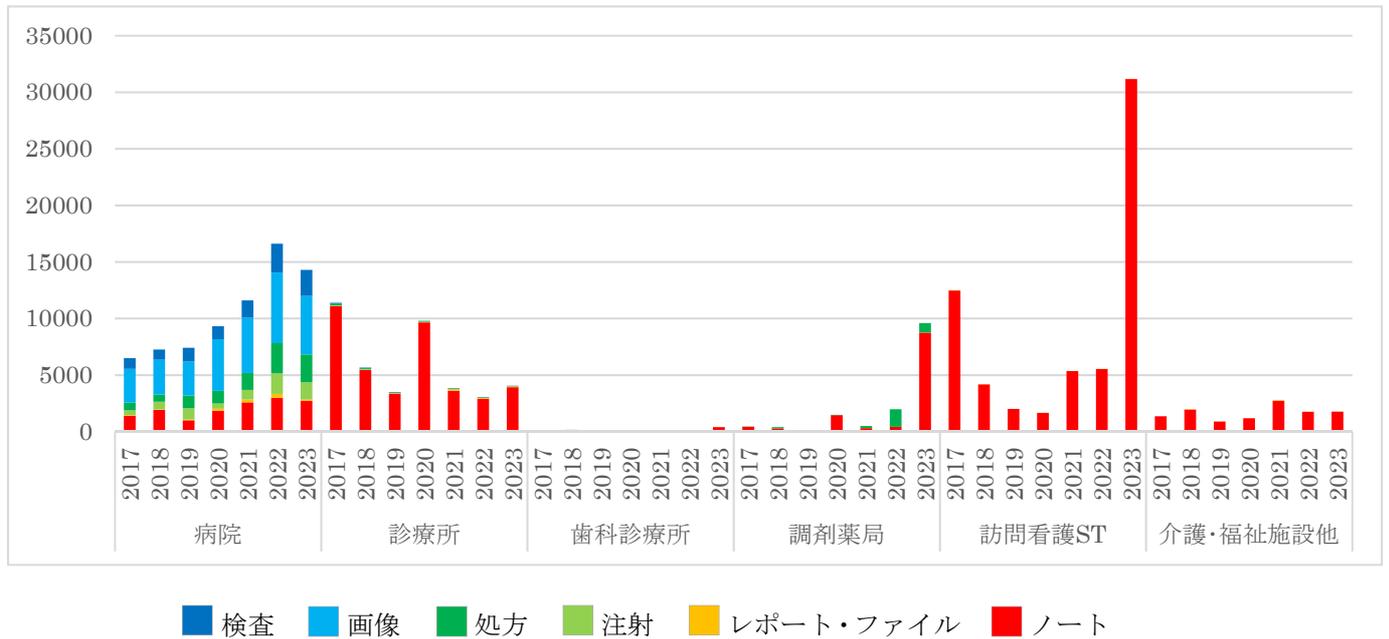


図 5 診療所の参照先・参照項目

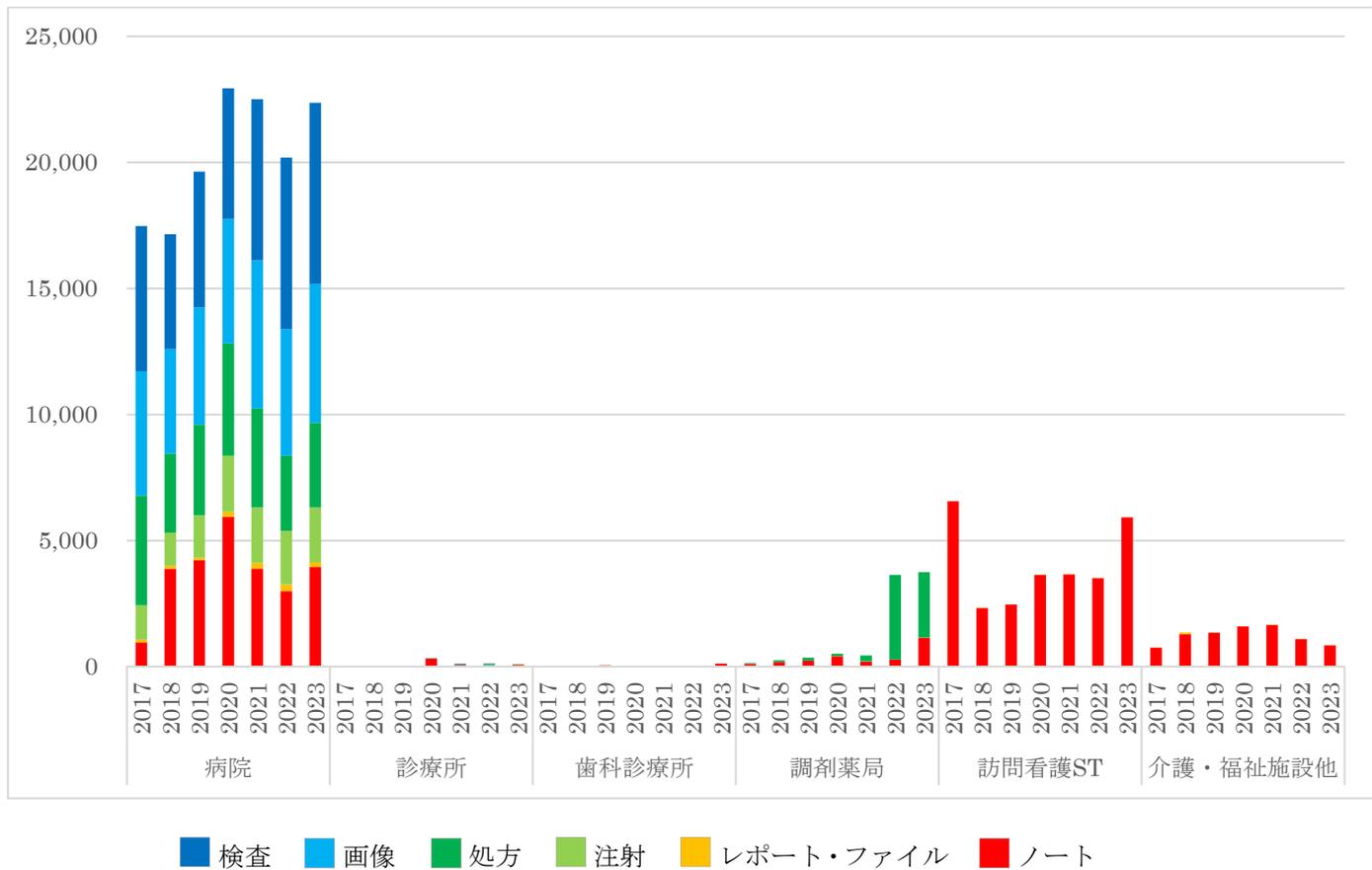


図 6 歯科診療所の参照先・参照項目

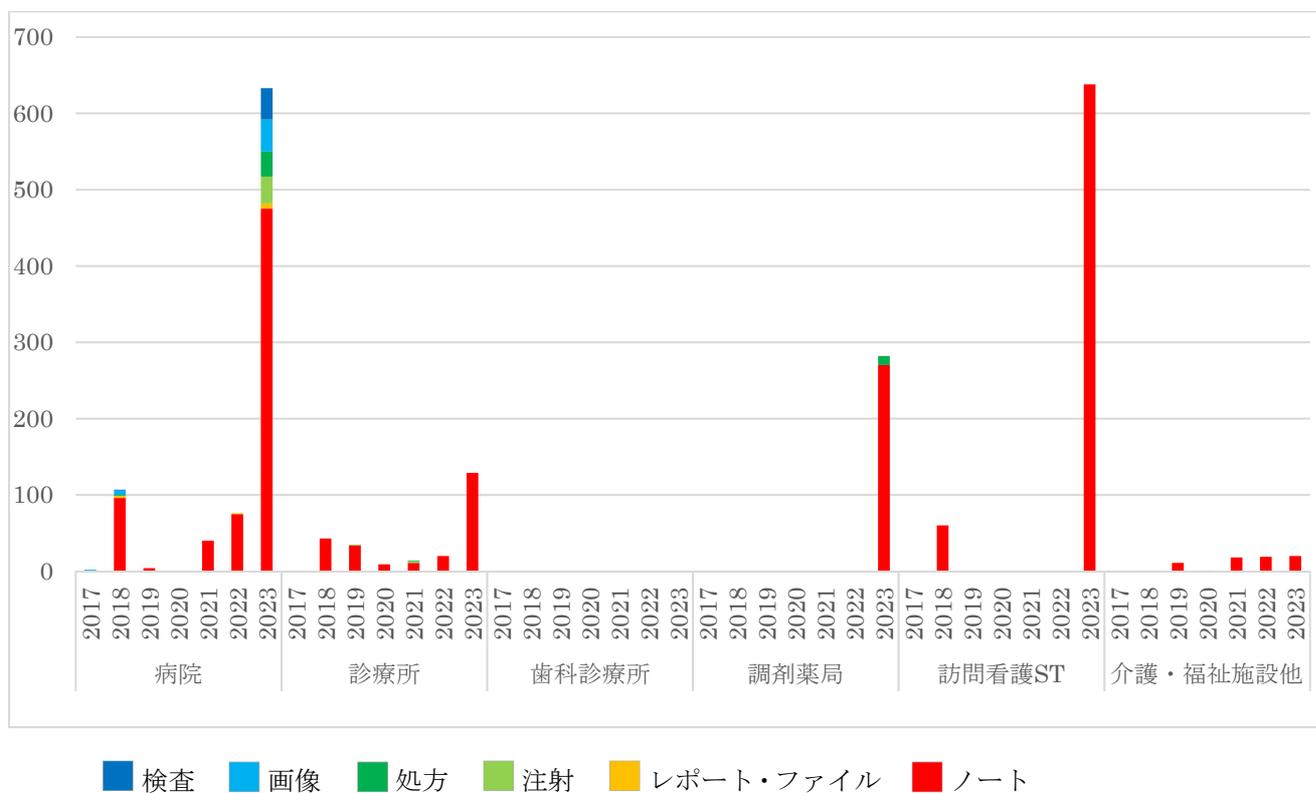


図 7 調剤薬局の参照先・参照項目

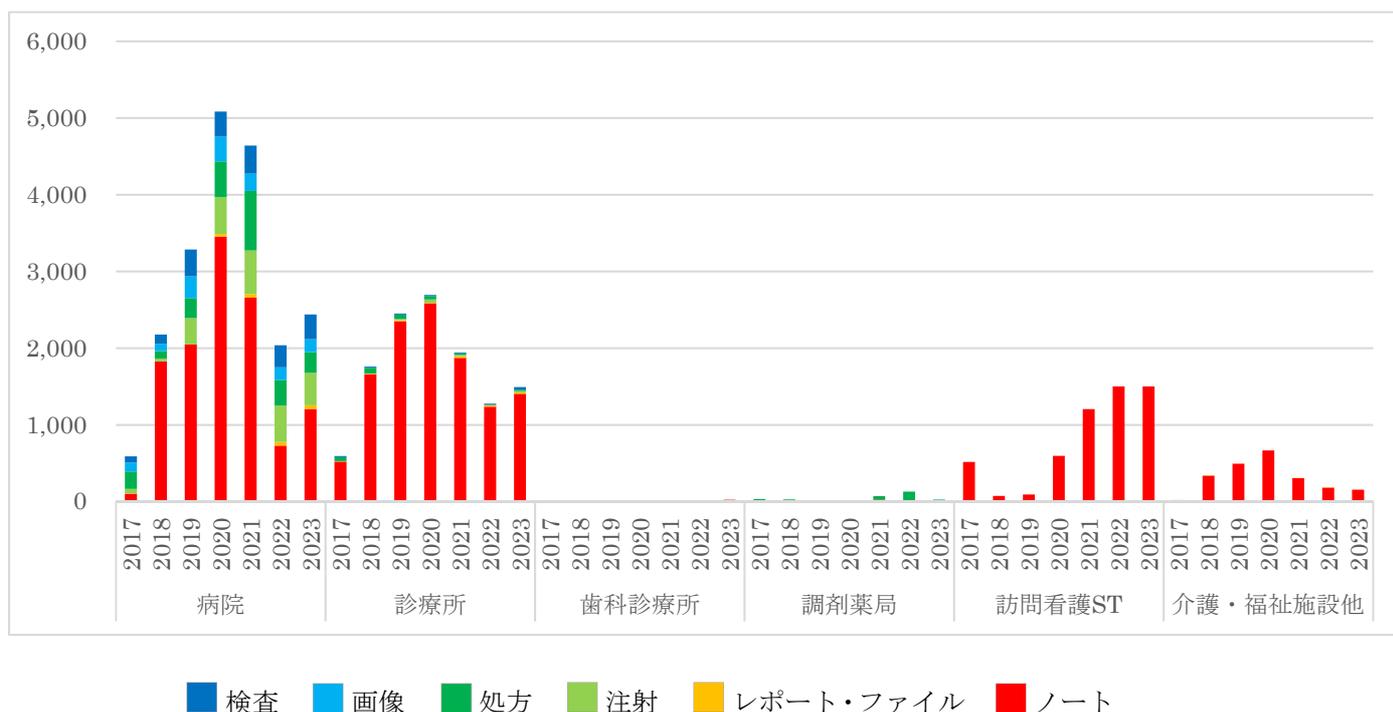
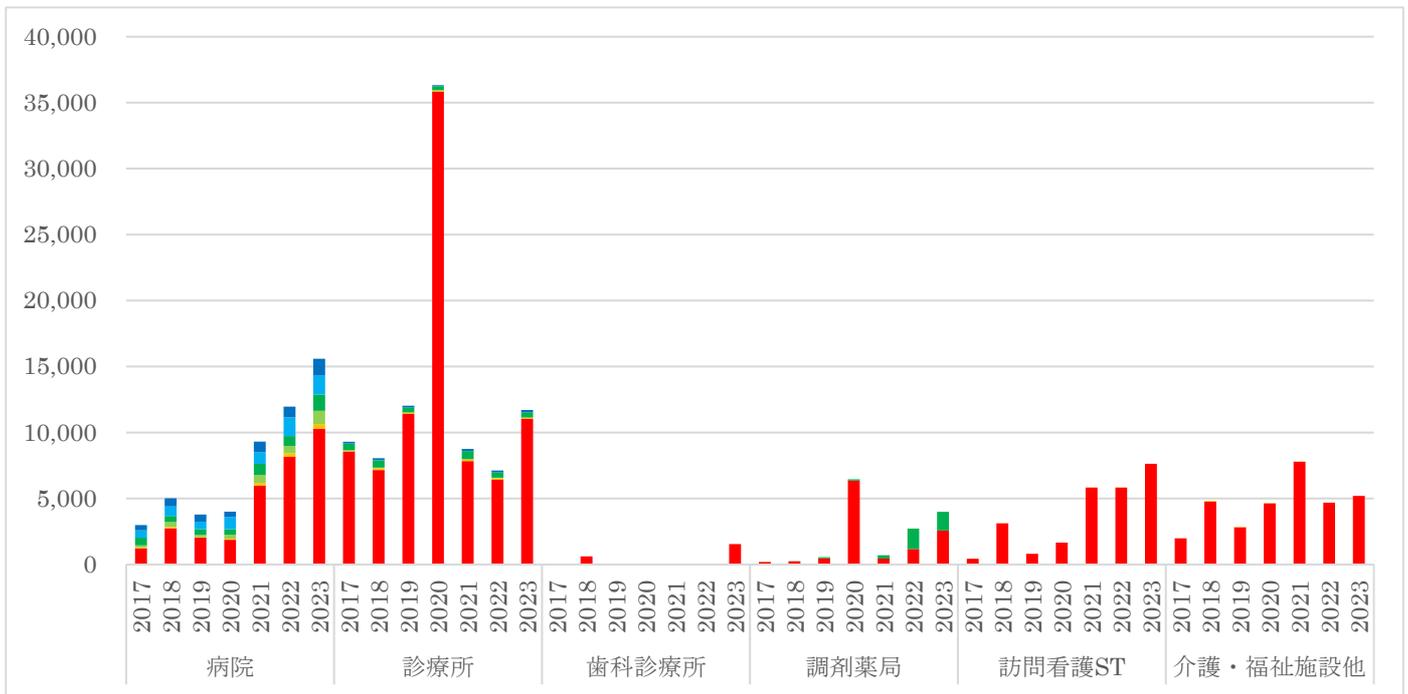
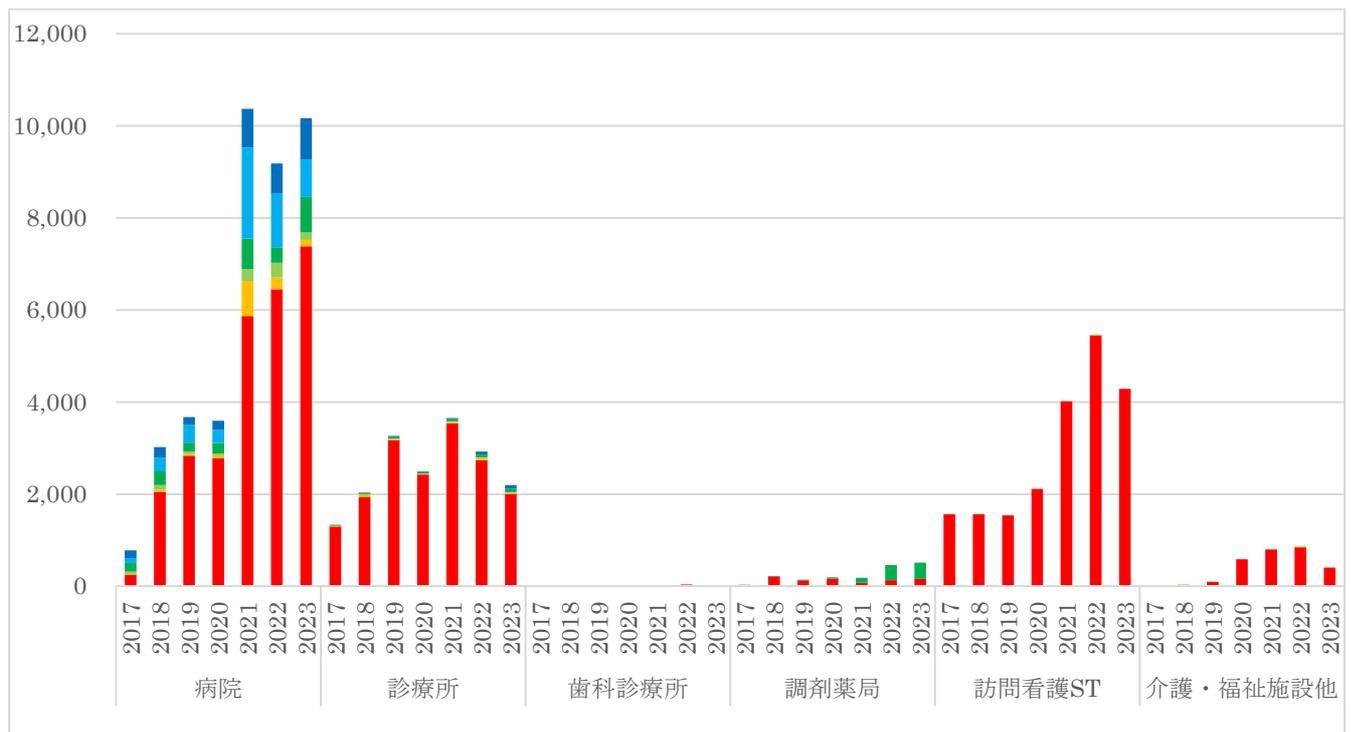


図 8 訪問看護ステーションの参照先・参照項目



■ 検査 ■ 画像 ■ 処方 ■ 注射 ■ レポート・ファイル ■ ノート

図 9 介護・福祉施設の参照先・参照項目



■ 検査 ■ 画像 ■ 処方 ■ 注射 ■ レポート・ファイル ■ ノート

アクセスログの解析結果

(1) アクセス件数の年次推移

アクセス件数については2017年度から2019年度は70,000台で横ばいとなっていたが、2020年度には120,000台にアクセス件数が大幅に増え、さらに2023年度は160,000台を超え、大きく伸びている。病院と診療所での利用は2017年度以降徐々に増加しており、2023年度において病院の利用の増加が目立つ。調剤薬局、介護・福祉施設での利用は2019年度から増加が目立つ。訪問看護ステーションは2020年度大幅に増え、2023年度の増加も目立つ。歯科診療所は2023年度に参加施設数が増え、アクセス件数も大きく増加した。(図1)

2017年までは医師のアクセスが全体の60%以上を占めていたが、同年に南信州在宅医療・介護連携推進協議会において多職種参加が承認されことにより他職種が数値を伸ばし、2020年以降では対照的に医師以外の職種の参照が70%となっている。特に2023年度はPT・OT・STの参照割合が33%となった。(図2)

項目別ではノートの参照が60~75%を占めているが、医療情報(検査・画像・処方等)へのアクセス件数も増えており、中でも処方や画像の参照が多くなっている。(図3)

(2) 施設別のアクセス状況の解析

病院の総アクセス数は2015年以降増減を繰り返しているが、これは年によって、診療所と訪問看護ステーションのノートの参照数に増減があるためである。病病間の医療情報(特に画像)の参照は着実に増えており、病院では、ism-Linkは医療機関間の診療情報の共有のための手段の一つとして定着している。(図4)

診療所では主に病院の医療情報の参照に利用されている。また、在宅医療を積極的に行っている診療所では多職種(特に訪問看護、調剤薬局)との連携のため利用されている。(図5)

歯科診療所では特に病院、訪問看護ステーションとの間のコミュニケーションの手段として利用が進んでおり、診療所、調剤薬局との連携も伸びている。(図6)

調剤薬局では特に病院、診療所との間のコミュニケーションの手段として利用されており、2021年度からは訪問看護ステーションとの連携に利用されている。また、病院の医療情報も参照されるようになってきた。(図7)

訪問看護ステーションは診療所との連携での利用が主体であり、2020年度は特に診療所のノートの参照数が多かったが、2021年度は例年並みの数値となった。一方で、病院との情報共有で利用されるようになってきたため、2021年度以降は対病院の数値は伸びている。(図8)

介護・福祉施設では主に病院・診療所・訪問看護ステーションのノートの参照に利用されていたが、2021年度では新たに施設の理学療法士による画像とノートの活用があり、数値を伸ばしている。(図9)

ism-Linkは医療機関間での医療情報の共有、在宅医療での多職種連携のための「情報インフラ」として定着し、利用が進んでいる。